

# 大川をいつか映画に

## これカラ —大震災を生きる

139

くもなかつた。  
「大川小は私の原点。校舎にはつらい記憶だけな

く、助かった子や卒業生、犠牲になつた74人の子の夢

あの場所に行くたびに『今まで大事に生きなさい』と奮い立たせてくれる」

震災でいつたんは諦めかけた夢にも再び向き合う。大川小の校舎は、欠かせない光景の一つだ。ただ、校舎の保存について話し合う中で自分たちの考えを通すだけでなく「意見が違う人の話も聞く必要がある」と

北上川が流れ、背後に山が広がる。自然豊かで大好きな古里。いつの日か、自分の手で映像に収めたい。そう胸に抱いてきた。

石巻市の石巻高3年佐藤そのみさん(18)

講者が集まってきた。学校でわが子が命を落としたことに疑問を持つていた。自分は近くの公民館に通い、ボランティアに勉強を教わった。

1年ほど前。

□

「大川小が

壊されるかもしれない」と聞かされた。「子どもが犠牲になつた校舎を見るのはつらい」と思う保護者が多いと知った。「自分も何かしなくては」。ボランティ

業式を迎える。4月から関東の大学で映画製作を学ぶ。生まれ育つた大川地区を舞台にした映画への夢は、大川小6年のころから温めていた。

中学2年の時、東日本大震災で大川地区も津波に襲われた。自宅は無事だったが、母校では児童と教職員84人が犠牲になつた。その中に6年生だった妹みづほさん(当時12歳)もいた。すぐには受け入れられなかつた。

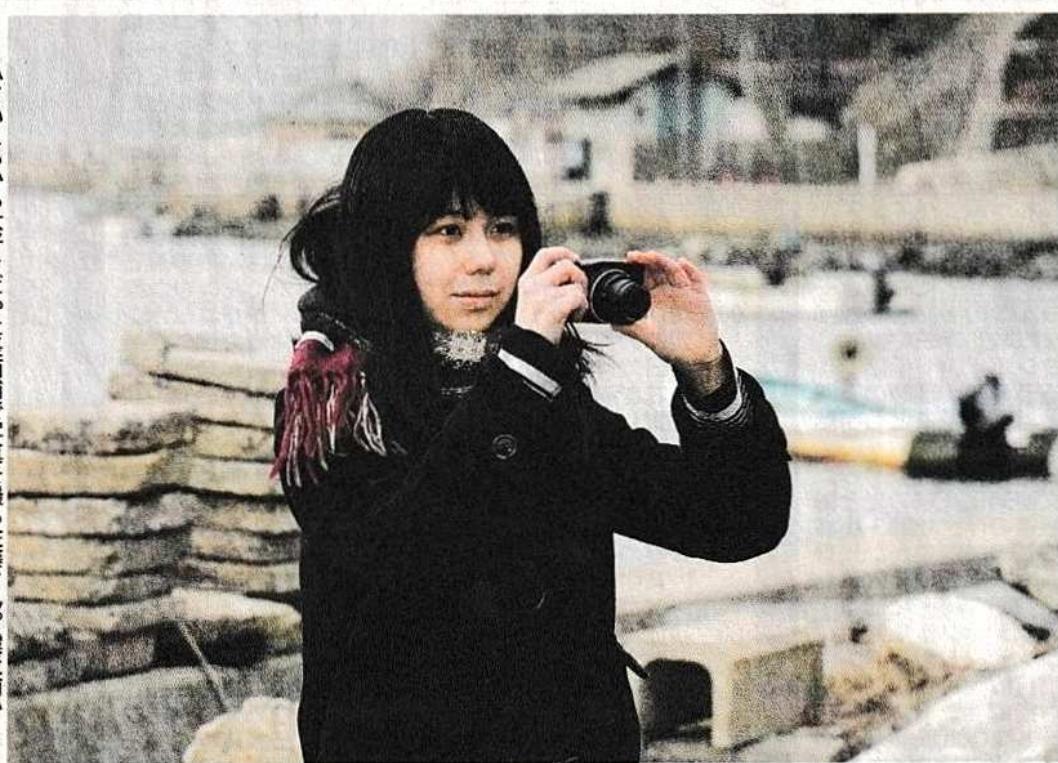
毎晩のように、自宅に保つた。震災を風化させたくない。大切な場所を失いたく

ちと語り合つた。昨年、仙台と東京であつたシンポジウムで訴えた。「校舎を残してほしい」。

でも、震災を諦めたくない。震災前か

第22部 私の一歩 ①

石巻市 佐藤そのみさん(18)



小さいころから大好きだった長面浦で写真を撮る佐藤さん。震災前から大川地区的風景をカメラに収めている

春、多くの人が新たなスタートを切る季節がまた巡ってきた。震災から間もなく4年。さまざま思いを胸に、一人一人が決意の一歩を刻む。

□ 第22部は6回続き